



鶴ヶ島市長 齊藤 芳久氏

## 市長のメッセージ

鶴ヶ島は、古くからの先人たちと、昭和の時代に転入してきた多くの方々が、共に作り上げてきた歴史を持つまちで、本年9月1日に、市制施行30周年を迎えます。

市が目指す将来像である「しあわせ共感 安心のまち つるがしま」を合言葉に、「子どもにやさしいまちづくり」、「いつまでも健康でいられるまちづくり」、「多様な働き方が実現できるまちづくり」にしっかりと取り組んでいきます。

## はじめに

鶴ヶ島市は、埼玉県のほぼ中央、都心から約45km圏内に位置し、北は坂戸市、西は日高市、東は川越市に接している。市域は、東西約6.9km、南北約4.9kmで、面積は17.65km<sup>2</sup>、人口はおよそ7万人である。

市内には、東武東上線鶴ヶ島駅、若葉駅、東武越生線一本松駅の3つの鉄道駅があり、東京メトロ副都心線・有楽町線、東急東横線と相互直通運転を行っている。道路では関越自動車道が南北に、圏央道が東西に走っており、それぞれに鶴ヶ島IC、圏央鶴ヶ島ICがある。

交通の利便性の高さから都市化が進む一方、市内には南西部地域を中心に農地や樹林地、水辺などの武蔵野の原風景が残る。「身近な自然と調和した地の利があるまち」として発展を続けてきた鶴ヶ島市は、今年9月に市制施行30周年を迎える。



鶴ヶ島市運動公園の夜桜

## ☀「栄養・身体活動・社会参加」でフレイル予防

新型コロナウイルス感染症は、高齢者や基礎疾患のある人がかかると、重症化しやすいといわれている。人が集まる場所を避けるなどの感染予防が大切だが、その一方で外出を控え、家に閉じこもりがちになると、高齢者は「動かないこと(生活不活発)」でフレイルになるリスクがある。

フレイルは、体や認知機能、社会とのつながりなどが低下した虚弱な状態を指す言葉である。健康上の問題で日常生活が制限されることなく、元気に生活できる期間を健康寿命と呼ぶが、この健康寿命を延ばす鍵として、フレイル予防が注目されている。

フレイル予防には、「栄養・身体活動・社会参加」の3つが重要であることが、東京大学高齢社会総合研究機構の研究からわかっており、鶴ヶ島市は、フレイル研究のパイオニアである同機構の協力のもと、フレイル予防の取り組みを進めている。そのポイントは「しっかり噛んでしっかり食べ、しっかり動く、そして社会性を高く保つ」ということで、具体的には、筋肉量を保つため、しっかりとたんぱく質を摂取するとともに、無理せずにできるウォーキングや筋トレなどを行う、そして孤立しないため、友人・知人やご近所の人などとの交流を積極的に行うことなどが推奨されている。

市は、フレイル予防を通して、いくつになっても元気で、生涯にわたり健康で暮らせるまちづくりに全力で取り組んでいく。

## 鶴ヶ島市概要

|                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| 人口(2020年12月1日現在)  | 69,883人              |
| 世帯数(同上)           | 31,827世帯             |
| 平均年齢(2020年1月1日現在) | 47.0歳                |
| 面積                | 17.65km <sup>2</sup> |
| 製造業事業所数(工業統計)     | 40所                  |
| 製造品出荷額等(同上)       | 611.9億円              |
| 卸・小売業事業所数(経済センサス) | 412店                 |
| 商品販売額(同上)         | 1,211.5億円            |
| 公共下水道普及率          | 82.6%                |
| 舗装率               | 88.1%                |

資料:「令和元年埼玉県統計年鑑」ほか



## 主な交通機関

- 東武東上線 鶴ヶ島駅、若葉駅  
東武越生線 一本松駅
- 関越自動車道 鶴ヶ島ICから市役所まで約2km  
圏央道 圏央鶴ヶ島ICから市役所まで約2km

## すねおりあまごい 脚折雨乞

鶴ヶ島市は、都心のベッドタウンとして発展してきた面があり、鶴ヶ島を魅力ある地域とするために、市民が一体感を持ち、郷土に愛着を持てるものが必要とされてきた。そうしたなか、市指定無形文化財である脚折雨乞が、2005年に国選択無形民俗文化財に選ばれ、2013年には財団法人地域活性化センターが主催する第17回ふるさとイベント大賞で、最高賞である大賞を受賞したことで、貴重な地域の行事としての認識が深まった。

この脚折雨乞は江戸時代、日照りの時、<sup>かんだちがいけ</sup>雷電池のほとりにある脚折雷電社の前で雨乞を祈願すると必ず雨が降ったという伝承が残る伝統行事である。孟宗竹と藁、荒縄で作られた長さ36m、重さ約3tもの巨大な龍神は、脚折地区白鬚神社を出発し、300人の男たちに担がれておよそ2kmを練り歩いた後、雷電池に入る。男たちが「雨降れたんじゃく、ここに懸かれ黒雲」と必死に叫び、池の中で大暴れした後、龍神はその場で解体されるが、これは池を汚すことで神を怒らせ、雨を降らせるためといわれている。

この勇壮な雨乞行事は、1964年に一度途絶えていたが、地元住民の熱い思いから1976年に復活し、その後は4年に一度実施されてきた。残念ながら、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、2020年に予定されていた脚折雨乞は開催が見送られたが、早期の再開が待たれる。

## 子どもにやさしいまちづくり

市は、今後10年のまちづくりの方向性を示す第6次総合計画を策定し、2020年度からスタートさせた。その重点戦略の一つが、「子どもにやさしいまちづくり」である。具体的には、放課後の児童の健全な育成を推進するため、学童保育室を新規整備するほか、中学校校舎の一部トイレについては、洋式化や車いす対応便器の設置など改修工事を実施する。また、小中学校体育館の照明をLED化するなど、児童・生徒が快適な学校生活を送れるように努めている。

市は、子育て世帯を中心とした若い世代に選ばれ、住み続けてもらうことはもちろん、子どもたちが一度市外へ出たとしても、「将来、自分が子育てをするときには、また鶴ヶ島に帰ってきたい」と思えるようなまちづくりを進めていく。

(井上博夫)



国選択無形民俗文化財、市指定無形文化財「脚折雨乞」